

「香山」と墨書された土器



(左下の土器の口径は13.4cm)



調査地遠景 (1985年) 北西から 遠方は香具山

これらの土器に書かれた「香山」とは、香具山のことで、出土したのは、藤原京左京六条三坊の地にあった井戸からで、そこは香具山の西北麓、まさにお膝元にあたる場所です(現在は、奈良文化財研究所 都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)の庁舎が建っています)。井戸からは「香山」と墨書された土器が全部で9点出土しており、いずれも奈良時代のもので、

では、この文字はどのような目的で書かれたのでしょうか？

「香山」の文字は土器の底部に書かれており、食事の際、土器を使うときにはみえないことから、運搬時や保管時に意味をなすと考えられます。このような土器の底に書かれた文字は、同じ形の土器を逆さまに重ねた一番上に置かれ、供給先を示していたとする意見があります。

このような見解が妥当であるならば、土器が運び込まれた奈良時代の香具山西北麓には、「香山」の名を冠した施設が置かれていた可能性が高いでしょう。

その施設が具体的にどのような役割をもっていたのかについては、発掘調査で確認された奈良時代の遺構が少ないため、確定することはできません。ただし、調査では奈良時代の良好な土器が数百点もみつかっており、平城京に遷都した後も、調査地周辺で多くの人々が仕事をし、食事をとっていたことは確かです。今後の調査により、当地一帯の奈良時代の様相がより詳しくあきらかとなることを期待しています。

(飛鳥資料館 若杉 智宏)